

末黒野

すぐろの

5月号 (通巻765号)



万華鏡

小川玉泉

湯殿まで飛石伝ひ寒北斗
水餅の真白き肌を焦がしけり
松山へ冬田を渡る鷺の群
北風強し妻に足湯を使はする

起き上がる妻に手を貸し日脚伸ぶ
ひと月に二度の満月春隣
満天星の万の冬芽の紅を刷く
寒明や未明の空を宇宙船
春浅き日を煌めかせ万華鏡
湯煙の真っ直ぐ白し谷の梅
曇らざる二重の玻璃戸梅開く
浅春の川波の綺羅眩しめり

梅散りぬ

松本三千夫

星空の余寒まともに耳ふたつ
妻の小言ほろりと苦し花菜漬
柴折戸の掛金新た露の臺
足許を浚ふ波音干若布
人なつこし恋に破れし猫の声
黄梅のさ走り咲けり水の上
海見ゆる道を選び梅の山
春時雨河原の石の先づ濡れて
春の夜や秒針ばかり忙しなく
梅謹悼 山下海先生一輪散るやたちまち日は翳り
二月十五日なれば
西行は桜に召され師は梅に

乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）
太字は推薦句

昨夜の雪

菅野日出子

点滴のベッドの窓の雪しづく
登校の声のはじける深雪晴
菜園のがらくた覆ひ昨夜の雪
早梅の紅や人形供養の碑
薄紙の造花さながら寒牡丹
渡り来し鴨日溜りの羽繕ひ
初天神ハングルの絵馬まじりをり

潦

菅野蒔子

くわりんの実雪被て転ぶ留守の家
恙無く覚めし証の雪を掻く
待春の道ぬれ色の夜明けかな
立春の日ざし朝餉の卓にかな
腰痛は加齢ゆえとふ戻り寒
浅春やあてなく結ぶ靴の紐
雨水今日雀のあそぶ潦



霜 真白 木下和代

誰となく話したとき日や枇杷の花
凍星や瞬きのこゑ聞えさう
星よりも風の凍れる家路かな
寒林や乾ける風の素気なく
畑の菜のひれ伏して居り霜真白
霜解けの畦に足あと置いて来ぬ
昏れ初むる冬川の驚動かざり

風 花 熊切光子

枯芝に音のしみ入る夜の雨
寒月や剪定終へし五葉松
霜つよし虎杖の葉のまくれなる
風花や潮の香満つる貨物駅
恙やや和らぐ思ひ童の玉
風花や尺にも満たぬ湯女の墓
落暉いま枯葦原の水に入る

茎 立 小山紫乃布

ライターの炎の揺るる余寒かな
胸中を誰にも告げず夜の梅
芽柳の夕日をたたむ運河かな
茎立ちてより葉牡丹の息づかひ
落椿渦巻く川の蒼みをり
夕暮れて寡黙となりぬ葱坊主
鶯や薬師如来のやさしき目

鶯 小山ミツ子

我が輩と言はぬばかりの恋の猫
良き夢を見たる目覚めや水温む
鶯や補聴器欲しと子にねだる
谷戸に住む友の便りや濃紅梅
初蝶や母子ともども大声す
引潮の岩場に採りぬ流れ海苔
啓蟄や草刈り鎌を研ぐ翁

青炎集

横浜 立野千鶴子

風に乗る校舎のチャイム四温晴
手遊びに折る千代紙や梅ふふむ
風花やむかし宿場の常夜灯
トランプの占ひ吉と春立ちぬ
マネキンの透けるブラウス春浅し
ちぎり絵の指に残れる余寒かな

横浜 新堀満寿美

手を入れて日輪くづし冬の川
パンダナの鉢巻きりり池普請
笹鳴の主のいづこや日の眩し
声移る栞しらびの先や夕笹子
威勢良き媼より買ふ寒蜆
あけぼのの朱鷺色めきて春立つ日

小川玉泉選

横浜 中山良子

日溜りの枝垂梅二分異人館
茜濃き富士西に据ゑ夕花菜
夜のとばり庭しろじろと雪積り
草の葉の緑を深め雪解くる
東京の東照宮の塔に雪
下校子の手に鬼の面明日追儼

横浜 城戸 緑

七種の浅き野の色残る粥
閉めてより日の豊かなり白障子
探梅や木の間隠れに海の碧
馬車道の瓦斯灯ともる雪催
馬場走る調教の馬息白く
蹄鉄を付け替ふポニー下萌ゆる



横浜 河合とき

枇杷島は枇杷のかたちや夕時雨

茅葺きの山門寂と寒椿

冬日差し込む梵鐘の由緒書

お手付きもありて意中の歌加留多

通すほどの意地は持たざり着ぶくれて

遠来の客にともあれ葱鮪鍋

横浜 石黒興平

ほのぼのとみなとみらいの初明り

臘梅の日に融けまじと日を透す

八州今冬將軍の膝下かな

鬼の面つけて福豆売られけり

家中の明かりをともし豆打てり

下萌や引込線の鉄路錆ぶ

横浜 戸田澄子

老梅に支柱や夫に車椅子

束の間の夜の初雪でありしかな

加湿器の水切れサイン雪降り来

癌病むと友の便りや梅の冷え

草餅や白陀時彦師を知らず

蒼天を恋しこひしと犬ふぐり

横浜 真柄百合子

少年ら薄氷の池乱しけり

戦争を知らぬ紅梅咲きはじむ

三葉芹沼のうちがは見せざりき

やはらかないるあつまりし花馬酔木

平凡な日々紅梅の色に酔ひ

友よりの幸福便や花菜漬

横浜 嵐 弥生

一二輪落ちて咲き継ぐ寒椿

童心に戻りて走る枯野原

幾度も初雪覗く玻璃戸越し

街灯の光ちりばめ雪しづく

春立つや老の背押す風硬し

菜をきざむ朝の厨の冴返る

横浜 鍋島武彦

夜廻りや遠く華やぐ街明り

寝ねがての枕に染むる析の音

炉話の村長囲み茶碗酒

寒月や彫りを深むる磨崖仏

落日や枯野の沖の水明り

夢殿へ続く築地や春の雪

耕 土 集

松本三千夫選



古川 敦子

横浜 藤田千枝子

水底のぐらりと揺れて寒の鯉
枝折戸も庭の一景梅の花

臘梅のかほりて闇のひろがりぬ
鴉潜り水面の刻の止まりけり

目覚むれば肩に淋しき余寒かな
一条の厨の水や寒もどり

舗装路の寸土逃さず霜柱
全身で笑ふ嬰兒冬うらら

ぼつねんとベンチの翁日脚伸ぶ

行列の先に特売寒玉子

登校の子らの畦ゆく息白し

梅田 武

ふる里を丸く包みて深雪かな

低く飛ぶかもめの声や雪催ひ
縄跳びの大波小波名草の芽

薄氷をゆすりて鯉の目覚めかな

久寿餅の蜜よりまづは春立ちぬ

臥す友の窓の明かりや名残雪

釣鐘に籠る余寒や街の音

神苑の満つる日差しや福寿草

島を背の帆柱数ふ春隣

電話力ードの穴二つ増え春隣

芝 孝子

寄ればどこか病める話や寒戻り

恵方道燈百段を息急きて
竹爆ぜていよよ佳境や浜どんど

白日の白梅といふうすみどり

どんどの火煙しと星のまたたきぬ

滑り台春の空よりすべる児等
母の座は既に空つぽ春こたつ

火の匂ひまとひて戻るとんど果て
笹鳴きや日の差す杜のひとつこ

神谷さうび

根本 公子

競り人の息しらじらと魚市場 横浜 土田 亮

葱を買ふ浅間を指呼の道の駅
妙義過ぎ行く手に雪の浅間山

ペランダの野菜啄む寒雀

堂隅に座蒲団の山牙返る

雪棹の首残りをり奥只見 石井 勇

寒風や浪引きちぎり飛ぶ海綿
校正の朱の花咲きて春めけり
鰯酒や狼煙岬の今日は風

べか舟の揺れつつ戻る寒茜

炯眼の日蓮像や夕時雨 本田 耕造

護摩木焚く音舞上り初大師 鈴木加代子

ストーブに齢を見する掌をかざす
それぞれの律儀さを読む賀状かな

村遠し一灯ともる枯野駅

問伐の切り口白き余寒かな

春灯し昭和の歌聴く深夜便
木の香立つ姐干すや寒日和
水温む一羽の鷺の影落し

旅の宿眠ることなき雪中花 日野 中村 月代

問診が句の話へと日脚伸ぶ 米山やすえ

グレンデに不意に出でたり昼の月
味噌搗や茹でて大豆の金の艶

一鍋の玄米スープ寒見舞

寒鰯は友の好物快気膳

通院は小さき旅よ梅の径
幼な子の双手で包む寒卵
句を友に不治の病を残る菊
癒ゆる夢捨て室の花求めけり

白梅の一樹を誇り村旧家 横浜 都留百太郎

料峭や少し濃いめの死に化粧 中島ひろし

息ふるる程に手操りて梅を嗅ぐ

恋猫の主の意なんど上の空

春草や野仏北へ傾ける

霜柱踏む楽しさのありにけり

老幹を叩く嘴日脚伸ぶ
齒磨を搾り切つたり寒の底
枝先へ力ふつつ冬木の芽
風呂吹や大言壮語の友の逝く